俳句と滑稽について考える（二）

荒井良明

前回同様、「滑稽」の範囲を広くとって「俳句は滑稽なり」について考えていきたい。

前回の拙論へのお便りで知った一句

連尿（つればり）の会話のはづみ天の川　　八木健

これは八木健会長のモンゴルでの詠だという。モンゴルの大草原の一隅で「連尿＝つれしょん」をする。空には満天の星。ひふみん（将棋の加藤一二三さん）ではないが「いいな～」。会話も弾んだことだろう。

春風やおれのしょんべん曲りけり　　丹羽文雄

大学入学後、最初にトイレに入ったとき見た落書。

「お～、街の公衆トイレとは違う！」と思った。

雪降る様子に「どんどど」というオノマトペ

どんど焼どんどゝ雪の降りにけり　　小林一茶

この句は角川大歳時記では「どんどゝ」の部分が「どんどと」になっている。「どんどゝ」を普通に読めば「どんどど」になると思うが。

豪雪地帯の雪の降り方を言うのに「どんどど」というオノマトペ（擬声語＝擬音語＋擬態語）を使うとは、さすがは一茶。「どっどど　どどうど　どどうど　どどう／青いくるみも吹きとばせ」（『風の又三郎』の冒頭より）などというのも連想された。

リフレインで韻を踏んで滑稽味が出る

さて一茶の前掲句だが、「どんど」「どんどど」と韻を踏んでいて、このリフレインが面白い効果を生んでいる。滑稽味が感じられる。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

寒からう痒からう人に逢ひたからう　　正岡子規
あなたなる夜雨の葛のあなたかな　　芝不器男
笛ふきて夏終わらしむ笛ふきて　　金子兜太
羽子日和続き続けり続けかし　　松本たかし
孤愁病愁旅愁老愁都鳥　　黒田杏子

人間の身体の一部を詠めば自然に滑稽味が出る

ちんぽこもおそそも湧いてあふれる湯　種田山頭火

えぇ～、と思った方もいらっしゃると思う。私はこの句に初めて接したとき、学生時代に旅した玉川温泉（秋田県）を思った。玉川温泉は、療養・静養を目的とした湯治場（湯治宿）である。当時は大浴場が混浴で、山頭火の前掲句の通りだった。

しかし、そこにはいやらしい感じは微塵もなく、「人間だもの」という感じだった。山頭火も滑稽を狙ったわけでなく、人間賛歌を詠んだのだろう。

アイロニー（イロニー）

下ネタのようなことばっかり！　と憤慨ぎみのあなたに、ここでちょっと高級っぽい考究を。

ブリタニカ国際大百科事典「滑稽」の項では「滑稽の様態としては機知、風刺、アイロニー（エイロネイア）、ユーモアなど」があると言っている。

あやまちはくりかへします秋の暮　　三橋敏雄

これは、広島平和記念公園の原爆死没者慰霊碑の碑文「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」を踏まえて詠まれている。そして、戦争を繰り返す人類へのアイロニカルな視線に満ちている。

俳句の本質はアイロニーだという人もいる。そうであるならば、アイロニーは滑稽の一部だから、俳句の本質は滑稽だということにもなろう。かくして、山本健吉の、そして八木健会長の所説は裏付けられたと愚考する。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。